

補論 偽書ウエツフミの作者

### 幸松葉枝尺と「大友本」

吉森 健

はじめに

偽書ウエツフミには、二種類の異本がある。

「宗像本」と「大友本」である。

#### ■宗像本

大野郡土師村庄屋宗像良蔵の家に古くから神の文として伝えられてきた古文書があった。

奇妙な文字（後に神代文字の一種とされウエツフミ文字または豊国文字と呼ばれるようになった）で書かれていて、天孫降臨の地、日向高千穂で展開されたウガヤ王朝七十二代の物語を記した文書であった。

天保二年（一八三二）、府内城下の国学者幸松葉枝尺（さきまつはえさか）がこれを発見する。

幸松は明治五年（一八七二）写本を完成し、明治七年、初代大分県令森下景端が中央政府に報告する。

本稿では、この宗像家伝来の古文書を「宗像本原文」といい、幸松が明治五年に完成させた写本を「幸松宗像本」または単に「宗像本」と呼ぶ。

#### ■大友本

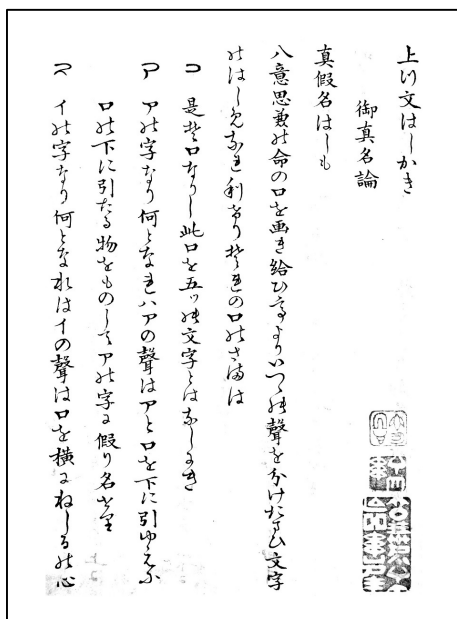
「宗像本原文」が明治六年に大野川の氾濫で流没する。

代わりに臼杵福良村の大友淳（旧大友氏家臣の末裔という）の家から、ウエツフミの異本と思われる文書が出現する。これを「大友本」といい、現在まで大分県立図書館に保管されている。

明治七年、森下県令の依頼で臼杵の書家春藤倚松がこの「大友本」の正確な写本を作成する。

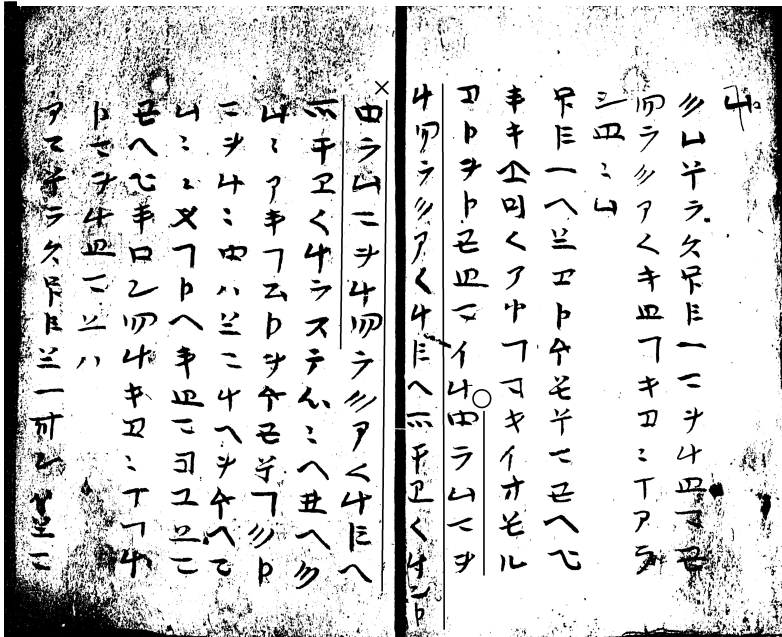
これを「春藤大友本」という。  
「春藤大友本」は二〇〇六年、臼杵市に里帰りして市の登録文化財に指定され、現在臼杵図書館にある。

明治七年 春藤倚松写本の「大友本」  
序文 上つ文はしかき (図1)



重複の例 (大分県立図書館蔵「大友本」上ツ記 貳乃綴)

※傍線部 ○ と × (筆者記入) は、同文で重複 (図2)



筆者は前稿(一〇四号「春藤倚松大友本で見えてきた偽書『ウエツフミ』の作者」)で、この両本の作者はともにウエツフミの発見者幸松葉枝尺その人であると断定した。

「宗像本」は、これを完成させたのが幸松であるのでわかりやすいが、「大友本」は幸松のものとは違う筆跡で書かれており、発見当初からそれを書いたのは別人だとされてきた。

筆者は大分県立図書館蔵「大友本」の内、虫食いの少ない部分を訳して、その結果を、サイト「解説 上紀 田中勝也」で公開しているが、「大友本」には文字の誤記や文節の脱落・重複など機械的な筆写によると思われる頁が多いことを確かめている(同サイトではそれらの箇所<sup>1</sup>に註を付している)。

筆者が「大友本」も幸松の創作であるというのは、「大友本」の原本となる写本を幸松が筆をとって書き(これを本稿では「幸松大友本」と仮に呼ぶ)、その原本「幸松大友本」から作成された写本が大分県立図書館蔵の「大友本」になったという意味である。

本稿では、前項で明らかになった事実(※文末註)を踏まえて、この「大友本」の成立の事情を考察する。

次の節に分け論を進める。

- 一 「大友本」の文字についての幸松葉枝尺の証言
- 二 最初の五十音図
- 三 「幸松大友本」の作成
- 四 「幸松大友本」から「幸松宗像本」への切り替え
- 五 「大友本」の作成事情

一 「大友本」の文字についての幸松葉枝尺の証言

幸松葉枝尺は、亡くなる三年前の明治八年（一八七五）、ウエツフミの発見と筆写の経緯について弟子の内藤平四郎に口述し、それを、内藤がウエツフミ文字で記した「マネビチウコトノアゲツライ」という著書を遺している。

この著書の「宗像本原文」を最初に見た時の状況を記した部分は、

「その文のはしがきあり　こを読みとみるにいとうるわしきはしがきにしあれば　やゝやゝに神代（かむみよ）の文字をまねびてその文を読みつれば　いともかしこき文にもありけり」（マネビチウコトノアゲツライ、以下マネビと略す△十七）と、このウエツフミが普通の文字ではない特殊な文字で書かれていることを述べている。

このあと、仮名遣いに悩みながら何度も文字を変えて写本を繰り返した末に「幸松宗像本」を完成させる。ここまでは、すべて「宗像本」についての話なのであるが、最後の部分で「大友本」についてと思われる言葉を追加しているのである。

訳文を記す。

「またことわっておくが　原文（もつふみ）の中に　文字を変えて書いたのがあった　ここに二つ三つ書いて驚かそう

中　を　中　と書き　久　を　大

口　を　𠄎　へ　を　ノ

火　を　只　と書く類のことがあった

これらは　𠄎　く　𠄎　ト　へ　フ　𠄎　（おともと

のふみ）にあった文字ではなかったであろう　これは原文（もつふみ）を書くときに　筆をとったものが賢（さかし）ら心で書きかえたものと思うので、私はこれを書き改めておいた」（マネビ　△十九、△二十）

ところでこれら五つの文字

中大 𠄎ノ只　（ヤ、ス、ツ、ノ、ヨ）は

「大友本」で繰り返し使用されている文字である。このことは現在大分県立図書館にある「大友本」で確かめられる（上つ記四乃綴に多い）。

春藤もこの事実気が付き朱書している（春藤大友本二巻

左ノ綴原本ニテ只久ヲ大クヲハニ作ル  
蓋傳寫ノ誤依テ悉ク正ニ改ム

幸松はどんな意図でこのような事をのべたのだろうか。

吾郷清彦著「古史精伝ウエツフミ 附録」(昭和五十一年)が、この部分の原文と訳文を載せている。

吾郷氏は、**ヲクノトヘフニ** (おとも

とのふみ)を「おとともものふみ」に読み間違え、あるいは意図的に解釈して、

「思うに、これは大友(おとも)の原本に記しているモジではないであろう。私が写した原本を筆記した者が、賢(さかし)ら心で書きかえたものと思うので、私はこれを書き改めておいた」(七十九頁)と訳している。

幸松は確かに「原文(もとふみ)」で「宗像本原文」のことを言い、

**ヲクノトヘフニ** (おともとのふみ)と

いう言葉で「宗像本原文」のその上の原本のことを言っているだけであり、「大友本」には言及していない。

しかし吾郷氏の訳は、幸松のこの証言は「宗像本原文」中の「大友本」の文字について述べているということをはっきりさせているのである。

吾郷氏は、同書(一四九頁)で「大図本(大分図書館蔵大友本)は、宗像古伝本(宗像本原文)とともに大友古伝本といわれる両古伝本の一つである」と書き、続いて「大友本は…これは一般に中清書とみなされているが、筆者がコピーによつて精査したところによると、中清書というよりは、むしろ下書きの原稿に当るものといえる」と述べている。

「大友本」は「中清書本」で「宗像本」は「清書本」であると最初に書いたのは、吉良義風の「上記徴証十頁」(明治十三年)である。

幸松のこの証言の意図するところは、吉良義風(※吉良については前稿「三 明治政府への報告とその後ウエツフミ」参照)に、そして百年後の吾郷氏にもきちんと伝わっているのである。

しかし、筆者は、この「おゝもとふみ」の問題とは別に、幸松が「宗像本原文」中のウエツフミ文字の誤字を正したと証言していることに疑問をもつ。

この証言は三つのことを言っている。

一つは、「宗像本原文」はウエツフミ文字で書かれている。

二つは、「宗像本原文」の本文には、誤ったウエツフミ文字

中大ウエツフミノ只 があった。

三つには、これらの文字は「はしがき」中の五十音図の中には存在しなかった。これは誤字を正すためには基準がなければならず、その基準は五十音図以外にはなく、その中に誤字があるはずがないからである。

この幸松の三つの証言は、次節で紹介する文献の示す事実と矛盾することになるのである。

## 二 最初の五十音図

昭和四十八年、竹田市の橋爪春海氏は、論文「時世撰考の裏書について」(大分県立竹田商業高校昭和四十八年度研修紀要)を發表した。

幸松葉枝尺には、ウエツフミの写本や様々な著述があった。

彼の死後、それらの文献は弟子の内藤平四郎らの手に移り、内藤家が没落した際、竹田で代々神官を努めてきた橋爪家に移った。その文献の中に「時世撰考」という文書があった。

橋爪春海氏はこの「時世撰考」の裏書に、「萬葉略解」と題する幸松の署名のある文章を發見したのである。

寛政の頃村田春海ら三人の国学者が著した「萬葉略解」という本がある。万葉仮名で書かれている万葉歌を平仮名で読み解説を施している本である。

幸松がその本の万葉歌をウエツフミの文字で書き写し、その序文を書いて慶応元年(一八六五)十一月十一日の日付で署名している文書が見つかったのである。

序文には「これの真仮名ハ 豊くにの司の命のいたく古事のすたらん事を嘆き給ひて と見かう見まして 古事をあけつらはしゝ はし書きにも有り」とある。

「豊くにの司の命」とはウエツフミの編纂者たる大友能直のことであり、この序文が「上つ文はしかき」から作成したものであると述べているのである。

「上つ文はしかき」の内容を、この序文との比較のためにここで略述する。

(1) 八意思兼命(ヤココロオモヒカネノミコト)が口の形

を描いてアイウエヲの五つの音を区別した(※図1)。

(2) 五十猛命(イソタケルノミコト)が、このアイウエヲから五十の文字を作ったので、この名前がある。

形あるものから作られた文字と形の無いものから作られているので形仮名という(※古体文字と言われる象形文字であるが図は略)。

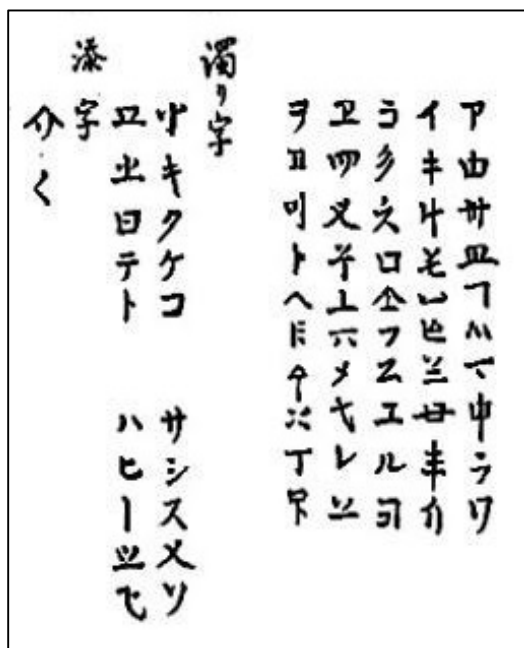
(3) 積羽八重言代主命(ツミハヤエコトシロヌシノミコト)は、この一つ一つの文字を重ねて文を綴ったのでこの名前のようにいう。

(4) 鵜萱不葺合(ウガヤフキアエズ)彦二代天皇の御代に積羽八重言代主命の後裔にあたる積羽兄田太命(ツミハエタタノミコト)と弟田太命(オトタタノミコト)の兄弟は、五十の形仮名を和らげて改良し、文字を綴るのに便利な新しい文字を作った(※図3)。

五十の文字に、濁り文字(濁音)と添え字(ヤとハ)、数字(※図は略)を加えた暗号解読表のようなもので、これらの文字で本文は綴られている。

続いてこの五十音図をもとに後に吉備真備が片仮名をつくったという話になっている。

ウエツフミ 五十音図 (図3)



因みにこの五十音図は、「上つ文はしかき」と同じものが本文にも書かれていて、それは「宗像本」も「大友本」も同じである。現在ウエツフミ文字とされているのは、この図3の五十音図の文字である。

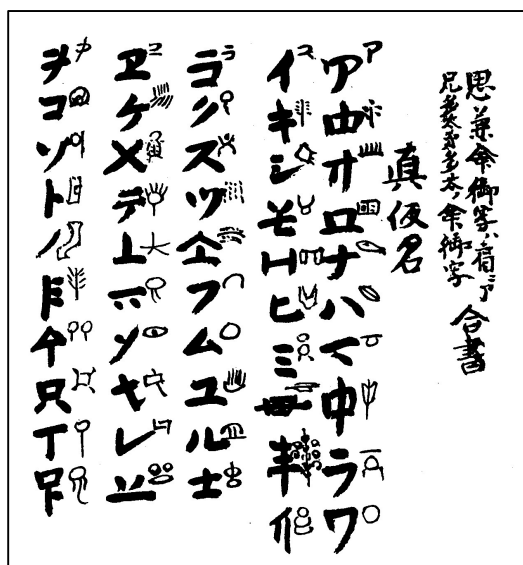
「萬葉略解」序文も同じ構成であるが、内容が異なる。由来の部分では、

(2)の五十猛命が五十音図を作ったという部分がなく八心思兼命が作ったとなっている。

そして形仮名(※象形文字)は「萬葉略解」序文では分散して図4の五十音図に書き込まれている。

(3)の積羽八重言代主命の部分はない。

萬葉略解 五十音図 (図4)



(4) では、兄田太と弟田太の兄弟は積羽八重言代主命の後裔ではなく、鵜萱不葺合命の御子となっている。

最も問題のある違いは、五十音図である。

ウエツフミの方(図3)には、五十音の内、現在使っている仮名が十一字であるが、「萬葉略解」の方(※図4)は半分以上二十九字もある。

「アイウエヲ」「キクケユ」「サシスソ」「ツテト」「ナノ」「ハヒフ」「マミム」「ユ」「ラルレ」「ワ」の文字である。

また濁音を示す文字(濁り字)と添え字もない。本文(万葉歌)では濁点を振っているのである(※図は略)。

そしてウエツフミの五十音図(※図3)の濁り字は、「萬葉略解」の五十音図(※図4)から、「キクケユ」「サシスソ」「テト」「ハヒ」の文字が移行した形になっているのである。また「セ」が「ゼ」に、「ロ」(た)が「だ」になっている。

そして前節で紹介した「大友本」で使われている五つの誤

字 中大ニノニ只の内、ノと只の二字が「萬

葉略解」の五十音図(※図4)に存在している。

この事実が幸松の証言の矛盾を明らかにするのである。

ノと只の二つの文字は、幸松の前節の証言が正しければ、これらの文字が「宗像本原文」の「はしがき」の五十音図に存在するはずはない。

もしそのような五十音図が初めから存在していたならば、これらの文字の鎮座する「萬葉略解」の五十音図をわざわざ新しく作成することはしないであろう。

結局、「宗像本原文」には五十音図はなく、従って、本文はウエツフミ文字で書かれてはいなかったということになるのではないか。

橋爪春海氏は、五十音図の由来を記した「上つ文はしかき」は「宗像本原文」にはなく、「萬葉略解」の序文から展開されたものであると考えたのである。

そして「慶応元年（一八六五）以前には、まだ『上記』は存在しなかったのであり、この年以後葉枝尺の宗像本写本を完成したという明治五年（一八七二）の間に成立させたのではなからうか。さらに、葉枝尺自身がこの神代文字及び『上記』の作者であるとするならば、これまでの推定に過ぎなかった『上記』成立事情の疑問も解決する。私はこれまで、あまり問題にならなかった葉枝尺を、『上記』成立の中心人物としたいのである」（『時世撰考』の裏書について）と書いている。

明快な推理である。

ただ、幸松葉枝尺には自身の証言のほかに、吉良義風や田近長陽が書き留めている証言がある。

吉良義風の「上記徴証」の中に、「然ルニ幸松氏ノ功ニ依テ書中ノ事項ノ如何ヲ知ニ至リ聞者或ハ信シ或ハ疑イ地方識者ノ談柄トナリシハ蓋シ文久二三三年（一八六二〜三）ノ頃ナリ」（四頁）とある。「萬葉略解」序文の書かれた慶応元年の一、

二年前にはウエツフミのことは世間に知られていたとしているのである。

また田近長陽は「宗像本原文」について「吾其流失る前年（※明治五年）葉枝尺が許にて、只一冊を見たるに最も古く、披見むも破損ぬさまなれば、只打見たるまでなり」（高千穂古文字伝六頁）と書いてある。

これらの証言は第三者（『上記徴証』では「地方識者」、高千穂古文字伝）では田近自身も関わっている事柄であり一概に否定はできない。

その内容はともかく、「宗像本原文」は存在し、文久二、三年には幸松の手になるウエツフミの何らかの写本は作成されていたようである。

こうした事情を考えた場合、「萬葉略解」序文の五十音図の由来はどうなるか。

筆者は、「宗像本原文」は、五十音図がなくても解説できる文字で書かれていたと考える。万葉仮名あるいは漢字仮名交じり、あるいは片仮名だけで書かれたものであると。

その内容は、神棚に置かれていたというから祝詞の一種であったかも知れない。

この「宗像本原文」の内容については、藤村七穂著「偽史源流行第二十四回」（歴史読本二〇〇一年十二月号）は、「幸松が宗像本を見出した時点では、おそらくウガヤ王統譜（の骨格）は存在した。こうした異伝は『古事記伝』『成文』には存在しないし、幸松の勝手な創作と主張するのも難しいと考えられるからである」と推定している。

また「日本の偽書」（文春新書二〇〇八年）の著者藤原明氏は、幾つかの近世の偽書には、中世に色々作成された「日本書記」の注釈書から派生した文献を利用したものがあり、ウガヤ王統譜もそのようなものであろうかと書いている（一八六頁）。

ともかく「宗像本原文」の内容の全てはウエツフミ本文の中に収められているのである。幸松の当時の読書環境からは到底考えられない内容があると確定できれば、その部分が「宗像本原文」に由来するものであろう。

幸松は、この普通文字で書かれた文書である「宗像本原文」から、新しく神代文字のウエツフミを作成するために、五十音図を考案したのではなからうか。

その五十音図が「萬葉略解」の五十音図であろう。

仮名遣いに悩んだ幸松は、何度か筆写に使う文字を変えて写本を進めている。そのことを「マネビチウコトノアゲツライ」で述べてはいるが正確な有り様はわからない。

しかし「萬葉略解」の五十音図の作成は確かに行われており、さらに何らかの理由で「萬葉略解」の五十音図をウエツフミ五十音図に作り替え、次の写本の作成に進んでいる。

それが「幸松大友本」であると筆者は考えるのである。

### 三 「幸松大友本」の作成

幸松の試行錯誤の中、ある時点で「萬葉略解」の五十音図が作られ、さらにその五十音図から現行ウエツフミの五十音図が作成された。

その新しい文字で最初に作成されたのが「幸松大友本」であると筆者は考える。

「大友本」は、この「幸松大友本」を別人が筆写・整理して作成した写本であると思うのである（次節）。

幸松の証言は、「マネビチウコトノアゲツライ」のほか吉良義風が「上記徴証」で、また田近長陽が「高千穂古文字伝」で書き記しているが、これらは相互に矛盾は見られず幸松は一貫した内容を語っている。

以下順を追って「幸松大友本」作成までの過程を筆者の推定を交えて再構成してみる。

■文久二、三年（一八六二〜三）の頃、幸松のウエツフミ発見の話は地方識者に知られるようになっていた（上記徴証四頁）。

この頃までに、「宗像本原文」の判読困難または欠損部分を本居宣長や平田篤胤の著作を使って補正または補充していたのであろう。

■慶応元年（一八六五）までに幸松は「萬葉略解」序文の五十音図を作成した。

これは万葉仮名を神代文字に変換するための表として実際に「萬葉略解」の本文で使われているが、序文では神代文字（ウエツフミ文字）であるとはっきり説明されている。

「萬葉略解」は裏紙となって封印されてしまったわけだが、万葉仮名をこの文字で書けばどうなるか試し書きしてみたのかも知れない。

■「萬葉略解」の序文から「上つ文はしかき」を作成した。五十音図の由来に五十猛命と積羽八重言代主命が登場し、

「濁り字」と「添え字」（※図3）が追加された。

この移行の理由は不明ではあるが、鵜萱不葺合命の御子とされていた兄田太と弟田太の兄弟が、「上つ文はしかき」では積羽八重言代主命の後裔となりウガヤ二代天皇の御代に文字を改良したという風が変わったことに関係があるかも知れない。

「萬葉略解」の五十音図が作成された頃までは、まだウエツフミ本文には積羽八重言代命もウガヤ二代天皇のことも書かれていなかったであろう。

つまり、ウガヤ二代天皇以降の物語は、「萬葉略解」の五十音図から「上つ文はしかき」五十音図に移行した時に追加されたと考えてもよいのではないか。

この「上つ文はしかき」の新しい五十音図で最初に作成されたのが「幸松大友本」であった。

先の「萬葉略解」序文の五十音図にある **ノ** と **只** の二つの文字は、「大友本」で度々使われている文字であり、後に誤字としてウエツフミ五十音図では消されているものである。

これは順序として「萬葉略解」に続いて書かれたのが「幸松大友本」であったことを示している。

習慣で誤って古い「萬葉略解」の五十音図の文字を使って

しまったためであろう。

また「大友本」ではハが添え字のくの代わりにしばしば使われているが、これも添え字のなかった「萬葉略解」の五十音図の名残であったのだと思われるのである。

■またウエツフミの内容が「大友本」から「宗像本」へ進んだことを示す一例を示す。

ウエツフミ文字が神々によつて作られていく過程は、「大友本」、「宗像本」両本ともに、「はしかき」だけでなく本文にも書かれている。

ウガヤ二代天皇から思兼命たちのつくった形仮名（※古体文字）を使いやすいように改良して、便利な文字を作るよう命ぜられた兄田太命と弟田太命の兄弟が、形仮名を和らげて五十音図（※図3）を作りだす段（※前節の「五十音図の成立の歴史」参照）の記述をみると、

「大友本」では、

兄弟の前に思兼命、五十猛命と積羽八重言代主命が現れ、「いまし（汝）いとまめなり かれ（だから）こりづてむ（教えよう）とまを（申）して すみ（清）とにこる（濁）とのいそごと（五十言）を つばら（詳）にさと（諭）したまひき」（春藤大友本八卷二十一頁）と簡明であるが、

「宗像本」になると様子が変わる。

兄弟は「大分（おゝきた）の速吸門（はやすいど）の向津島（むかつしま※無垢島か）の 国（くに）の御柱石（みはしらいし）の辺（べ）に 棚支（たなつ）くの小舟（おふね）に乗（の）らして 日（ひ）の毎（は） 三度（みたび）の御濯（みそと）ぎの 神訓（かむこり）の潮垢離（しをこり）て 八（や）つ 九（こゝの）つの平手（ならで）を 三度（みたび）拍（う）たして火（ひ）を鑽（き）り以（も）ちその海（み）に漁（いさ）る鱈物（はたもの） 御幣代（みてくらしろ）に奉（まつ）りて 左手（ひで）に青和幣（あおにぎて） 右手（みて）に白和幣（しろにぎて） 打（う）ち振（ふ）らして…、天津神（あまつかみ）たちに祈り「昼（ひる）ハ 十一（とうひと）つ日（ひ） 夜（よる）ハ 十（とう）つ夜（よ） 像代（かたしろ）の神楽（かむらか）を 称（たた）エまつる…」と、文字を教わる具体的な場所も登場する。魚を供え御幣を打ち振り十日にわたって神楽を奉げて祈るさまが書き加えられて描写はふくらみ、天津神たちの詔（みことり）「汝（いまし）まめなり…」（「解説上紀」十九綴三章）と続いていくのである。

完全な創作であろう。高千穂王朝の部分は前稿で示したよ

うに、このような追加の記述が多いのである。

「幸松大友本」が先に作られ、それを修正する形で「幸松宗像本」が作成されたことを示していると考えられる証言もある。

#### 四 「幸松大友本」から「幸松宗像本」への切り替え

明治十年（一八七七）一月東京で「上記鈔訳」を刊行した吉良義風は、巻き起こった偽作の批判に対抗すべく、「上記徴証」（明治十三年刊）の執筆に取り掛かる。

ウエツフミの異本であると見られた「大友本」に拠ってウエツフミの真書であることを証明しようとしたのである。しかし「大友本」を読み進むにつれ、「大友本」と「宗像本」の記述内容の違いが気になってきた。

「大友本」はウエツフミの「中清書本」であり、「宗像本」は「清書本」であると考えて両本の違いを説明していたのであるが、疑惑は完全に消えなかったようである。

明治十二年（一八七九）には、幸松葉枝尺の弟良蔵に、「大」を意味する「おほ」を、「宗像本」では **ヲ**（おと）、「大友本」では **フ**（おほ）と異なる文字を使っているのはど

うしたことだろうかと聞いている。

これに対して「良蔵氏対テ日向国臼杵郡岩戸村所在ノ銘中ニ **ヲ**（おと）トアルヲ以テ原書ニ **フ**（おほ）トアリシヲ **ヲ**（おと）ノ方正シカルベシトテ兄葉枝尺ガ全部ヲ書改メテ今ノ蔵本ニ製シタルハ正ニ明治三四年間ニテ其 **フ**（おほ）トアリシ本ハ則反古ニ投セシト云フ」（上記徴証十四頁）とある。

この説明を聞いて吉良は、「義風大ニ疑團ヲ氷解セシ」と書いている。

「岩戸村所在ノ銘」というのは、岩戸村にある天岩戸という山窟から掘り出された甕の蓋石の銘のことで、その銘文がウエツフミ文字で書かれていたのである。田近長陽の「高千穂古文字伝」（四六頁以下）によると大分県令森下景端が幸松の弟良蔵を遣わして調べさせ拓本を撮って持ち帰らせたものである。森下県令は宮崎県にも頼んで拓本を送ってもらっている。明治八年のことである。

幸松の発見については信じていた田近長陽であるが、良蔵の「甕の蓋石の銘」については細かにその疑わしい点を述べている。この蓋石はその後紛失しているのである。

三節で論証したように「宗像本原文」はウエツフミ文字では書かれていなかった。「甕の蓋石の銘」については別にして、幸松が「甕の蓋石の銘」の文字に合わせて **ㇿ** (おほ) を **ㇿ** (おゝ) に書き換えたという話は事実であったと考えられる。「甕の蓋石の銘」がウエツフミの真書を裏付けるための工作だとしたら、必要な作業であっただろうからである。

筆者はこのとき反故として処分されたという古い写本が元となって、「大友本」が作成されたと考えるのである。

## 五 「大友本」の作成事情

幸松が長い間ウエツフミの写本に邁進する過程で、書き換えられ不要となった写本は何度か反古として処分されている。前節で幸松の弟良蔵が言った「明治三四年（一八七〇〜一）間ニテ其 **ㇿ** (おほ) トアリシ本ハ則反古ニ投セシ」もその一つであろう。

内藤平四郎ら門弟から見た師幸松の姿は、判読困難な「神の文」を生涯かけてその解説に没頭する真摯な学者のものであった。彼ら門弟の日課はその師幸松が解説した写本の筆写であったろう。写本の内容が変わり、古い写本が処分される

のも、深化する師の研究・解説の結果であって何ら疑うべきものではなかった。

それらがどのようにして臼杵の大友淳の手に渡り、流没した「宗像本原文」の異本とされた「大友本」に仕立て上げられたのか、大友淳が先祖伝来の古文書を金を受けとって見せるのを生業としていたという「高千穂古文字伝」（一一八頁）の記事もあるが、幸松の弟良蔵や弟子の内藤平四郎らが「大友本」の作成にどのように関わったか具体的な像を今細かくは描けない。

本稿で筆者は「宗像本原文」に関する幸松の証言を偽証であるとした。

しかし、幸松には偽証の意識などなかったかのようである。彼が創作し付加していったウエツフミの記事は、彼の長年の読書と思索の結果であり、この世界の真実であると悟った内容であった。彼は日常ウエツフミの暦法を用い、この暦法を政府は採用すべきであると弟子に話していたのを田近は聞いている（高千穂古文字伝一一三頁）。

幸松葉枝尺の弟子たちにとっても、「大友本」が「宗像本原文」の異本であるのか、幸松の手になる「宗像本」の異本であるのか、違いはなかったであろう。

明治を迎えウエツフミが世の脚光を浴びるようになって、

「宗像本原文」の公開を迫る声は高まってくる。

そうした中で彼らが手元にあつた写本を整理して「大友本」を作りあげておいたとしても、彼らには偽作の意識はなかったであろう。

そうして明治六年、「宗像本原文」が大野川の氾濫で流没したとき、彼らの「大友本」はウエツフミの真書であることを裏付ける文書として当時確かに役立ったのであつた。

(よしもり・けん 会員)

【註 前稿で明らかとなつた事実の要約】

I ウエツフミ宗像本は平田篤胤の「古史成文」(文政元年刊)のあと作成された(ウエツフミの前半は古事記・日本書記の内容と重なっていて「古史成文」との比較が可能)。また幸松が発見したという天保二年までわずか十四年の間に、幸松以外の別人が先に書いていたという可能性は考えられない。※前稿(五 ウエツフミ宗像本原本の制作時期)。

II 「大友本」の制作時期についても「宗像本」と同じことが言える。つまり「大友本」が幸松葉枝尺の「宗像本原文」の発見以前に書かれた可能性はない。※前稿(六 大友本原

本の制作時期)

III 宗像本と大友本の比較の結果、高千穂王朝の部分が両本の間で大きく異なり、両本の写し元になつた共通の文献が存在したとはどうもい考えられない。※前稿(七 宗像本と大友本の内容の比較)

IとIIの事実からウエツフミは「宗像本」「大友本」とともに幸松葉枝尺が創作または何らかの原本を改変したものであることが確実となつた。

そして、IIIの共通の原本は考えにくいという判断から、両本共に幸松葉枝尺の創作になるものと断定した。

【参考文献】

本稿で幸松葉枝尺の証言を引用した文献は次の4点である。

- (1) 幸松葉枝尺著述「マネビチウコトノアゲツライ」(神代文化研究所編「ウエツフミ付録1」昭和十二年刊行)  
明治八年に幸松葉枝尺がウエツフミの発見と筆写の経緯を口述して弟子の内藤平四郎がウエツフミ文字で記したものの。

- (2) 田近長陽著「高千穂古文字伝」八幡書店オンデマンド

版

岡藩藩士で平田篤胤の門人であった田近長陽が明治九年に記した著書。幸松からの聞き書き、日向岩戸村出土の甕蓋の神代文字など当時のウエツフミに関する情報を一冊にまとめたもの。明治三十二年の「追次の記」とあわせ昭和七年「無明山人」筆写。

(3) 吉良義風著「上記徴証」近代デジタルライブラリー  
明治十三年刊行、吉良義風がウエツフミが真書であることを証するため幸松葉枝尺や幸松の弟良蔵に発見や筆写の経緯などを確かめた内容などを集め記した書。

(4) 橋爪春海著「時世撰考の裏書について」大分県立竹田商業高校昭和四十八年度研修紀要

この橋爪氏の論文は昭和五十五年出版の田中勝也著「偽書考」で一般に紹介され、八年後の中村和裕著「上つ文はしかき雑攷」（田中勝也「上記研究」付録）に文書の写真が掲載されている。本稿ではこの写真を使用した。論文は中村和裕氏からコピーの提供を受けた。中村氏に謝意を表したい。

#### ■追記

昨年（平成二十七年）七月十七日、病氣療養中の田中勝也氏が亡くなった。

筆者が管理するサイト「解説 上記 田中勝也」は、二十年前、「ウエツフミは大分県人が決着をつけるべき」という理屈で田中氏を説いて実現したものである。

前・本稿「偽書ウエツフミの作者」は、大分県人としての筆者が、「ウエツフミの作者」に関して一応の決着をつけるつもりで書いたものである。読者の判断を待つ。